

# 郷土館だより

V o 1. 12. No. 3

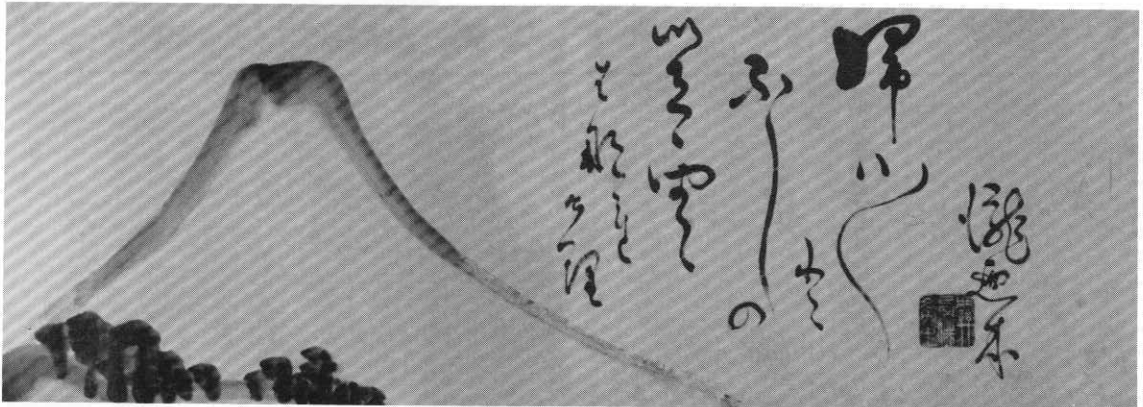
1990. 3. 25

富士を廻る俳人

## 瀧の本連水とその師匠展

2月25日～5月6日

たき もとれんすい しゅぎやくあんれんざん こさんどうたくろう  
瀧の本連水、種玉庵連山、孤山堂卓郎  
の俳句など約100点を展示しています。



### 連水と富士山

「日毎日毎 ふじ見て我は 老いにけり」  
連水は、富士百景を詠んだ句集『雲霧集』  
の中で、このようにしみじみと、自らの一生を  
振り返っています。ノ

ふわくと  
富士の  
笠雲  
はなれけり

ノいったい連水という人は、67年の生涯に、  
何回富士山を見、また、何首の富士山を詠ん  
だものでしょうか。

連水にとって、富士山はかけがえのない友  
であり、人生目標であり、そして師匠だった  
に違いありません。

伊豆佐野の連水の生家、<sup>かつまた</sup>勝俣家の長屋門前  
からの崇高な富士山(写真)に相對した時、  
初めて、少しだけ、連水の富士山に接し得た  
ように思えました。

# 連水と彼を育てた二人の師匠

ふるさとの人物シリーズの企画展、富士を廻る俳人「瀧の本連水とその師匠」を開催しています。

連水は俳諧の雅号。本名を勝俣猶右衛門といい、天保3年(1832)伊豆佐野に生まれ、後に佐野村の名主を務めた人物です。実父、花岳の影響もあって、若い頃より「風雅(俳諧)の道」を志し、読書に耽り、句作に励みます。

後に、連水は、この地方の俳諧の宗匠としての名声を高め、伊豆佐野の自宅に師から譲り受けた「俳関」の横額を掲げ、多くの文人墨客を集めるほどになりました。また、多くの門人が連水邸から巣立ち、彼らの多くは、

その後の地方俳諧の担い手に成長します。

連水の俳句人生は、明治26年に発刊した『雲霧集』に収斂されます。生涯に詠んだ数え切れないほど多くの俳句のなかから選りすぐった百首の富士の歌に、彼の人生が凝縮されています。

連水の死は明治31年10月4日。辞世の句に「踏み登る 道や尾花の 露の冷」を残しました。このような連水の俳句人生から、彼を「富士を廻る俳人」としました。

さて、ここでは、俳人連水に大きな影響を与え、彼を育てた二人の師匠について取り上げてみます。

## 孤山堂卓郎

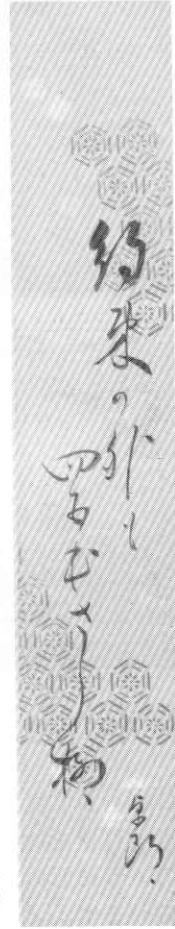
連水が幼少時代に受けた俳句の土壌は、父花岳の手解きを第一とすれば、第二は孤山堂卓郎から受けた影響であろうと思われます。しかし、連水と卓郎の師弟関係が文書などの記録に正確に残されているわけではないので、これはあくまでも推測です。ただ、連水の生家、勝俣家に所蔵されている多くの卓郎の俳句作品などから、両者の接点が必ず、ここ、連水邸にあったであろうことは想像に難くありません。

孤山堂卓郎は、文化11年(1814)三島伝馬町の酒屋小林正兵衛の次男に生まれ、16才で江戸に出、当代一流の俳諧師大梅居孤山に師事し、後には東部俳壇の雄となりました。『蕉風俳諧名家競』という番付表では、西の方江戸の大関にあげられます。晩年、慶応二年(1866)には『俳家新聞』の発行を計画するが、序文まで書き準備したところで、果たせず世を去りました。↗



黄鳥やほうと江を越す  
声の張

卓郎



約束の外も  
四五本どし柳

卓郎

▲以上のようなことが一般的に知られている卓郎についての事ですが、それにしても三島出身で大成した人物にしては余りにも少ない史料です。

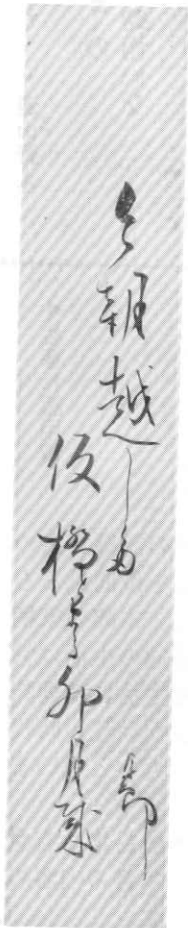
こうした意味でも、今回のような卓郎資料は貴重です。掲載の俳句短冊と冊子『俳諧なげぶし集』は、企画展の図録に掲載出来なかった新資料（三島市、大川和徳氏提供）です。



俳諧なげぶし集  
上

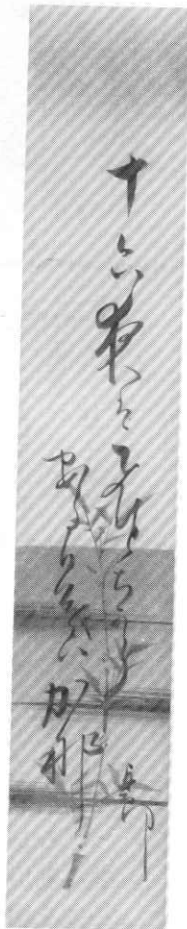


卓郎の落款には写真のような二種類が見られるが、時代の相違によるものと思われます。



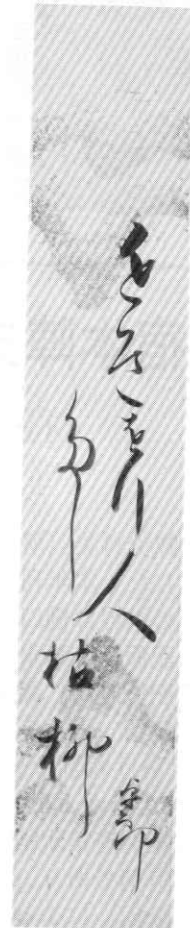
今朝越した  
飯橋とまる卯月哉

卓郎



十六夜はひとちから  
ある日暮かな

卓郎



近道を行く人  
多し枯柳

卓郎

# 種玉庵連山

連山は文化6年(1809)沼津市仲町の薬種商の富裕な家に生まれました。姓は窪田、名は半十郎。

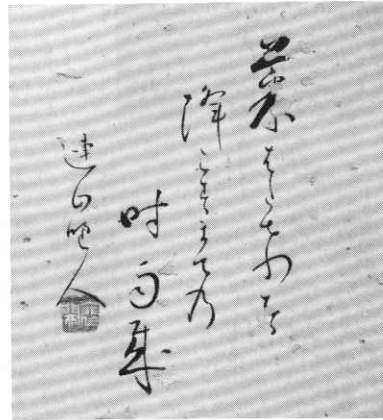
はじめは連山と号し、後には京都の高名な俳諧師、桜井梅室の門に入り連山と改めました。また宗祇法師の庵号、種玉庵を継ぎ、自ら種玉庵連山を名乗りました。

京都の桜井梅室の筆になる「俳関」の二字は連山の別号で、東海道の仮名関所として、多くの風流人に知られていました。

連水もまた連山の門人の一人として師の門戸を叩いたものでした。連山亡き(明治元年)後、「俳関」は連水の手に移り、さらに隆盛を見ました。



今日はかり人も  
年よれ  
初時雨  
六十叟山拝書



茶畑を  
降りこすまでの  
時雨かな  
連山野人

## 三島宿本陣史料集 (6)

「小遣日記仮控」等を発刊

三島宿本陣史料集(解説文集)が発刊の運びとなりました。本年刊行の史料集は、通巻6号で、その内容は樋口家文書の

- (1)小遣日記仮控 嘉永元年(1848)
- (2)小遣日記仮控帳 嘉永元年(1848)
- (3)盆暮諸用留 嘉永5年(1852)

で、本陣という特別な家柄の樋口家の勝手(台所)事情のわかる史料です。

樋口家は東海道宿駅制度が整備された江戸初期からの家柄であり、その生活の大部分は幕府御用(公用)によって成立していたから、



残された文書の大部分はこの為の記録で占められていて、一般家庭の樋口家を垣間見るものは少ないと思います。しかし、本陣の家柄とはいえ、やはり樋口家にも普通の生活は営まれていたはずで、その日常生活には興味を引かれます。本史料集は数少ない江戸時代の家庭文書発掘による価値あるものと思います。

こうした点からここでは、本史料集を有意義に利用していただくために、本書の内容の一端を紹介してみたいと思います。

# 小遣日記仮控帳の内容と構成

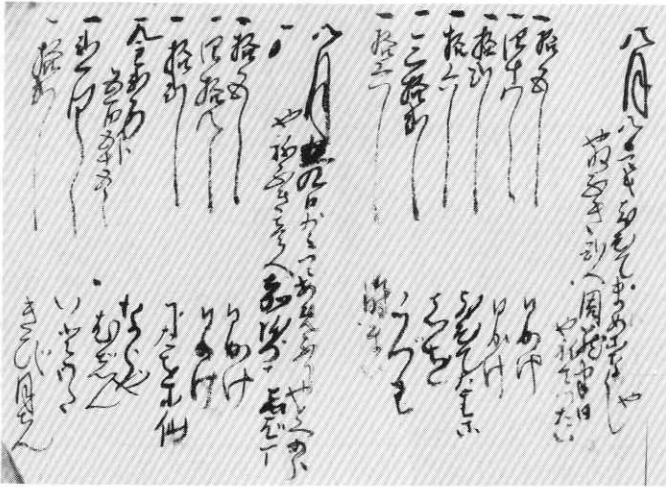
樋口家の勝手場で費した毎日の金銭を、嘉永元年（1848）7月14日から同年9月4日までの約2ヶ月間、克明に記録したものです。

史料は、日付と天候に始まり、次にその日の農作業、あるいは当日休・泊の諸侯の記録が続いています。以後は出費の記録が、初め

に金額、そしてその明細という順になっています。面白いのは記録の仕方と内容です。

例をあげると天候には「天キ」となっている日が多いが、これは晴れの日を指します。今様の「晴れ」「快晴」などではなく江戸時代の言葉であったのでしょうか。また、金銭の明細のなかに毎日のように「日かけ」とあります。15文、秋葉講の掛け金です。宿場の火災に備えて、樋口家などを中心に町の西境に秋葉神社を建てています。掛け金はこのためのものです。

## ▼小遣日記仮控原文書



## ▼解読文

八月八日天キおひでまめこなし也

やねふき式人周蔵半日

やねてつだい

一拾五文

日かけ

一四十八文

日かけ

一拾貳文

おひてたはこ

一三拾貳文

うづわ

一拾六文

御時まい

八月九日雲天あめふりやとへの分

やねふき式人嘉衛門 しば丁

一拾五分

日かけ

一四拾八分

日かけ

一拾貳文

下たを小仙

一金貳分と

ならや

五百五十五分

むじん

一貳百文

いとわた

一拾貳文

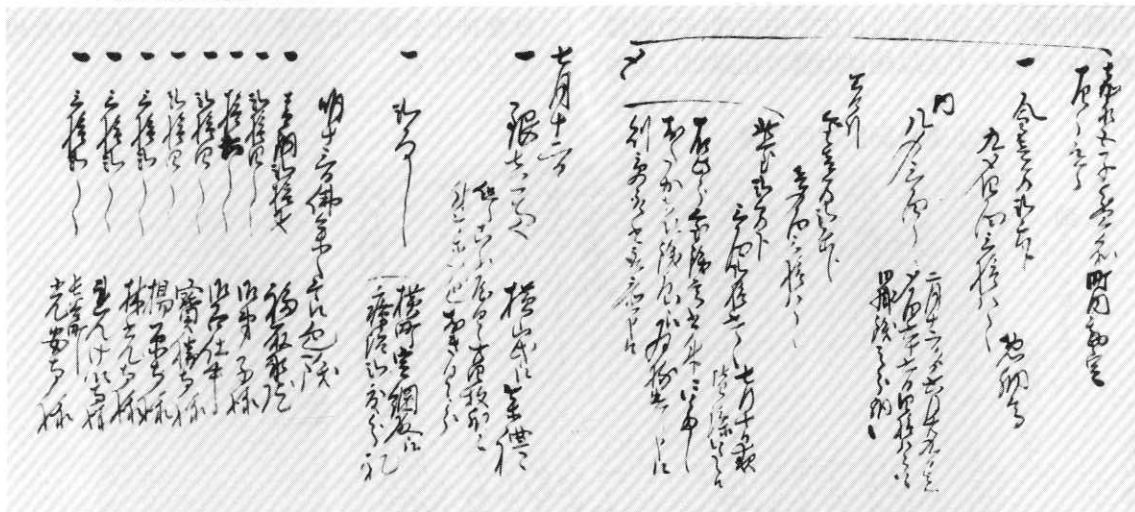
きび月ちん

# 盆 暮 諸 用 留

文字通り樋口家の盆行事を記した文書です。本陣樋口家ならでわの行事は墓参りです。本来樋口家の旦那寺は福聚院であるのに、盆の墓参りはこの寺を始め、八ヶ寺に及び交際の広さを物語るものです。

以上のように、本史料集では、樋口家の生活を通して江戸時代の暮らしを生き生きとのおどくことができます。これが可能なのも、本陣という特別な家ゆえにこのような文書が残り得たものと思われます。

## ▼盆暮諸用留



## ▼解説文

嘉永五子盆前町内勘定  
左之通り

一、金壹分貳朱ト 忽納高  
九貫四百三拾八文

内 二月十二日と六月二十九日迄  
八貫三百文 〆百六十六日四拾八文ツツ  
日掛銭之分納

差引  
金壹分二朱ト  
壹貫百三拾八分  
此金貳分ト 七月十日夜  
三百貳拾六文 皆済いたし候  
右此分金銭高書付二いたし  
おたかを以錢屋江薦持遣し申候  
則受取書取置申候

七月十二日

一、銀壹両 横山氏江參禮  
但しこふ屋具二十四枚外二  
付葉一包おきく分

一、貳百文 横町定綱殿江  
療治貳度分礼

一、青銅貳十疋 福聚院殿

一、貳拾四文 御弟子様

一、拾六文 御召上中

一、貳拾四文 寶勝寺様

一、貳拾四文 楊原寺様

一、三拾貳文 林光寺様

一、三拾貳文 れんけい寺様

長谷町

一、三拾貳文 光安寺様

## 郷土館 資料収集報告

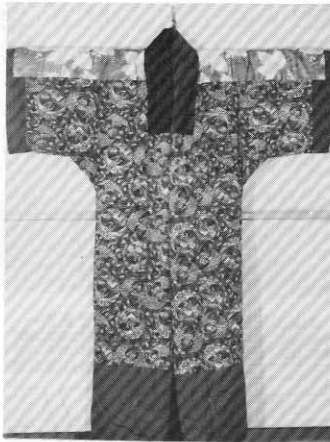
## 収集資料紹介

新収集資料を紹介します。市民の皆様からのお申し出により、多くの貴重な資料の寄贈を受けることが出来ました。

「北豆大地震記念写真帳」は昭和5年11月26日の北伊豆大地震の記録です。「三島銀行」と名の入った風呂敷は明治27年10月創設の三島銀行の品と思われます。三島の商業史の資料と言えます。

以下、一覧表と写真で、新収集資料を紹介します。

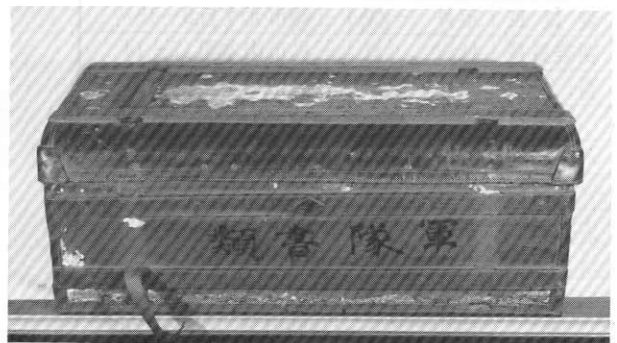
氏名	住所・電話番号	受入年月日	資料	点数
石川ぬい子氏	三島市緑町8-23	H.1.11. 7	北豆大地震記念写真帳	1
志良以博子氏	三島市中島97-1	H.1.11.14	卓上ミシン	1
伊藤 敏和氏	三島市広小路町4-5	H.1.11.30	歌舞伎座「大入」額	1
〃	〃	〃	教材「ソロバン」	1
仁科 静薫氏	三島市加屋町4-25	H.1.12. 9	風呂敷「三島銀行」	1
井上 一雄氏	三島市東本町	H.2. 2. 1	夜着皮	1
〃	〃	〃	夜着	1
佐藤 氏	菰山町寺家	H.2. 2. 1	菰山荒神様お礼	1
平田 氏	三島市	H.2. 3. 1	「西洋風景」栗原忠二	1
〃	〃	〃	「富士山」栗原忠二	1
〃	〃	〃	「みほとけ」澤田政廣	1
〃	〃	〃	「 〃 」 〃	1
〃	〃	〃	「妙法平淡」森有一	1
〃	〃	〃	「菊」下田舜堂	1
片岡 リチ氏	三島市西若町8-24	〃	軍隊用トランク	1
〃	〃	〃	重箱	1
〃	〃	〃	木ぎよ	1



◀ヨギ(夜着)  
着物の形をした綿入れ布団



▲歌舞伎座「大入額」昭和16年1月の火災をのがれて残った記念資料



▲軍隊用トランク

◀卓上ミシン  
シンガーミシンの旧形で、元は手回しだった。

好評です!!

# 「浮世絵三島」 の絵はがき



郷土館では、昭和62年度の企画展で「東海道浮世絵展」を開催し、又これを受けて翌63年の三島市政カレンダーは、浮世絵に描かれた三島を題材にして作成されましたが、両企画共に市民の好評を得ることができました。これは浮世絵版画の魅力と珍しい宿場時代の

## 郷土館運営協議会委員

郷土館の円滑な運営を図るため、郷土館に運営協議会を設けています。委員は次のかたがたでアドバイスをいただいています。

委員長	望月 一夫	三島市光ヶ丘8-15
副委員長	秋津 亘	三島市南本町17-14
委員	秋山 直樹	三島市初音台5-1
〃	荒木 寛衛	三島市富士見台23-4
〃	池谷 節子	三島市徳倉734-9
〃	石井 久	三島市大社町16-26
〃	重山 芳計	三島市清住町3-25
〃	鈴木 辰巳	三島市夏梅木872
〃	世古 祐三	函南町間宮799-2
〃	中山 久子	三島市芝本町11-26
〃	藤巻 哲雄	三島市千枚原2-2
〃	榎 茂彦	葦山町寺家28
〃	伊出 勝	三島市経済部長

三島風景が市民の心を打ったからだと思います。

そこで郷土館では、同題材を用いて「浮世絵三島絵はがき」を作成しました。

### 1. 絵はがきの内容

(1)題材 浮世絵に描かれた宿場三島

(2)内容 1. 東海道五十三対 田祭り図

2. 東海道五十三次 三島風景  
(行書)

3. 東海道五十三次 三島風景  
(隸書)

4. 五十三次名所図会 三嶋大明神一の鳥居

(3)形式 4枚1セット、袋入れ

(4)頒価 100円(4枚セット)

これら4枚の絵はがきは、どれも三島の昔をしのぶ、趣ある風景です。

郷土館ご来館の、あるいは三島来訪の記念になればと思います。現在郷土館窓口にて好評発売中です。

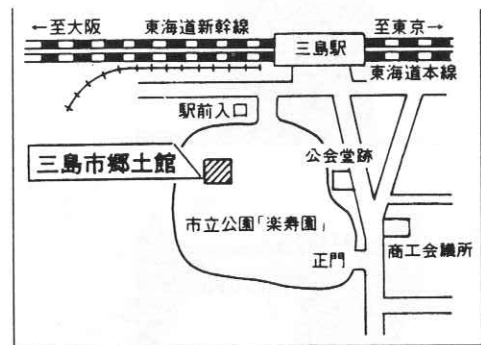
なおこれに続くものとして「浮世絵三島絵はがき(シリーズ2)」を今年販売を予定しています。

## 利用案内

休館日 毎月第2月曜・12月27日～1月2日

開館時間 午前9時～午後4時30分

入場無料(但し、楽寿園入場は、有料)



三島駅(南口)から徒歩5分。市立楽寿園内

## 郷土館だより No.36

平成2年3月25日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館

住所 〒411 三島市一番町19-3

TEL 0559-71-8228

発行 三島市教育委員会